

2020. 2. 23 第四主日礼拝

詩篇 148:1-14 「主をほめたたえよ」

聖書

- 1 ハレルヤ。天において主をほめたたえよ。いと高き所で主をほめたたえよ。
- 2 主をほめたたえよすべての御使いよ。主をほめたたえよ主の万軍よ。
- 3 日よ月よ主をほめたたえよ。主をほめたたえよすべての輝く星よ。
- 4 天の天よ主をほめたたえよ。天の上にある水よ。
- 5 主の御名をほめたたえよ。主が命じてそれらは創造されたのだ。
- 6 主はそれらを世々限りなく立てられた。主は去りゆくことのない定めを置かれた。
- 7 地において主をほめたたえよ。海の巨獣よすべての淵よ。
- 8 火よ雹よ雪よ煙よ。みことばを行う激しい風よ。
- 9 山々よすべての丘よ。実のなる木よすべての杉よ。
- 10 獣よすべての家畜よ。這うものよ翼のある鳥よ。
- 11 地の王たちよすべての国民よ。君主たちよ地をさばくすべての者たちよ。
- 12 若い男よ若い女よ。年老いた者と幼い者よ。
- 13 主の御名をほめたたえよ。主の御名だけがあがめられる。その威光が地と天の上で。
- 14 主は御民の角を上げられた。主にある敬虔な者すべての賛美を主の近くにいる民イスラエルの子らの賛美を。ハレルヤ。

はじめに

今日で1月から学んできました今年の教会標語「神に向かって歌う」についての思い巡らしを締め括ります。今日は全6回の思い巡らしのまとめにあたります。詩篇は全部で150篇ありますが、詩篇146篇～150篇は「ハレルヤ詩篇」と言われ、「ハレルヤ」ということばで始まり、「ハレルヤ」ということばで終わっています。ハレルヤということばを聞いて、ヘンデルのメサイアのハレルヤコーラスを思い浮かべる方もおられるでしょう。「King of

Kings, and Lord of Lords, and He shall reign for ever and ever, Hallelujah!」(王の王、主の主、主は世々限りなく統治される、ハレルヤ)と賛美する姿は圧巻です。この「ハレルヤ」に込められた思いを毎週の礼拝で、そして日常の生活で心に留めることができれば、私たちの毎日は喜びに満ち溢れるでしょう。

1. ハレルヤとは

ハレルヤとは「主をほめたたえよ」という意味です。詩篇 150 篇の最後のことは「息のあるものはみな 主をほめたたえよ。ハレルヤ。」とあり、人間の神さまへの最高の奉仕が「主をほめたたえる」ことにあるのです。ほめたたえる理由は「その大能のみわざのゆえ」であり、「その比類なき偉大さにふさわしく」ほめたたえるのです。角笛、琴、豎琴、タンバリン、踊り、弦、笛、シンバルという楽器が記されていますが、あらゆる音をもって全身全霊で主をほめたたえること、それが私たち造られた者の務めなのです。実際に手拍子で礼拝賛美をささげることは多くあります。

主をほめたたえることは魂の叫びなので、音楽の技術は問いません。どんな人でも主をほめたたえることができます。勿論、高い音楽性を持って主をほめたたえるクリスチャンアーティストたちがいることも知っています。しかし彼らは自分の音楽の技量を示して歌っているわけではありません。自分を救ってくださった主イエスさまを心からほめたたえて賛美しているのです。そこは世の多くのアーティストたちと決定的に違う点です。その典型は昨年 11 月にお迎えした久米小百合さん(芸名:久保田早紀さん)です。実はあのコンサートには知る人ぞ知る微妙な空気の違いがありました。久米小百合さんは音楽宣教師としてすべての楽曲に主への感謝を込めて賛美していますが、来場者の多くはもう一度 1980 年代の「久保田早紀」を聞きたいと思って来ていたのです。確かに多くの人が「久保田早紀」を聞きに来ていたのですが、久米小百合さんの賛美を通して、次第に主をほめたたえる賛美の世界に引き込まれて行ったことを見せていただきました。とてもすばらしいコンサートでした。そのすばらしさの源泉が「主をほめたたえる」ところにあっ

たのです。同じように私たちがささげる主への賛美も実にすばらしいものです。皆さんは今日の礼拝で心の底から「ハレルヤ」と言って主をほめたたえたいでしょう。日常の問題は尽きませんが、そうであるがゆえに週の初めに魂の叫びとして「ハレルヤ」と賛美することがどれだけの力になっているのか、その恵みの大きさは測り知ることができません。主をほめたたえて今週を出発しました。これでお互いの今週が守られることは保証されたのです。

2. 天も地も主をほめたたえよ

さて、詩篇 148 篇に目を移してみましよう。この詩篇には非常にスケールの大きな賛美への招きが記されています。「ハレルヤ。天において主をほめたたえよ。」(1 節) と、日、月、星の存在をもって創造主をほめたたえよとあります。宇宙に思いを馳せる学者たちが、その起源を論じていますが、聖書は神さまが天を創造したと記しています。この考えに立って天体の運行を研究したのが、アイザック・ニュートンです。「我々が知っていることはほんの一滴に過ぎない。他方、我々が知るに至っていないことは大海である。この宇宙の感嘆すべき配置と調和は、全知全能の存在から出たとしか考えられない」と語っています。創造主なる神さまの存在を抜きにして宇宙を語ることはできないと言ったのです。

さらに 7 節では「地において主をほめたたえよ。」と語り、海の巨獣、火、雹(ひょう)、雪、煙、風、山々、丘、木、獣、家畜、這うもの、鳥、老若男女など、地上のすべてのものが主をほめたたえるように招かれています。クリスチャンは天も地も、すべての被造物が主をほめたたえるために造られたという世界観を持っています。今月のレホボテのみことばカードに書きましたが、教会の花壇に植わっているデイジーが朝日を浴びて輝いている様子を圧倒されました。この世の白さとは思えない白さで輝く小さな花びらを見て、神さまの創造の御業を賛美しました。誰がこの白さを作れるだろうかと思ったときに、神さま以外には造ることができないと思ったのです。日常の忙しさの中で、こうした小さな出来事から神さまを思う時が与えられていることを感謝しました。すべてのものが主をほめたたえるために存在しているので

す。この世界観をもっと身近に感じ、生きることができたら、見るもの聞くものすべてが主をほめたたえることに繋がり、毎日が満たされること間違いありません。

3. 私たちの賛美をささげよう

天と地の賛美に加えて、私たち人間には魂を込めて神さまを賛美する力が与えられています。14 節の「主は御民の角を上げられた。主にある敬虔な者すべての賛美を、主の近くにいる民イスラエルの子らの賛美を。ハレルヤ。」と私たちを賛美へと招いておられるのです。

「主は御民の角を上げられた」とある「角」とは力を表わすことばですが、その力が賛美の力なのです。私たちが賛美できるのは、主が賛美する力を与えてくださっているからです。もとより罪人である私たちは賛美する力など持ち合わせていません。しかし、イエスさまによって救われた者は、主をほめたたえる恵みと力が与えられるのです。今私たちに「主の御名をほめたたえよ。主の御名だけがあがめられる。その威光が地と天の上で。」(13 節)と、主の御名をほめたたえる力が与えられていることに感謝しましょう。まさに「主を喜ぶことは、あなたがたの力です。」(ネヘミヤ 8:10)

天も地も、そしてすべての人間も主をほめたたえるために造られました。ただそのように自分が造られていることを知っている人は少ないです。特に日本では、限りなく少ないです。なぜなら、主をほめたたえることの幸いを知っている人は、イエスさまによって救われたクリスチャンだけだからです。私たちは願っています。礼拝にクリスチャンではない方々が招かれて、一緒に主をほめたたえることを通して、イエスさまの救いを得て頂きたいと。今年の教会総会で根岸兄によって賛美の新たなミニストリーが立ち上げられました。詳細を打ち合わせしました結果、キッズゴスペルとして立ち上げることを決定しました。子どもたちにゴスペルを通して、主をほめたたえることの恵みを伝え、イエスさまの救いを届けて行くことに集中することになりました。4 月第三主日午後が第一回目になります。どうぞお祈りください。皆さんの子どもさん、お孫さん、知り合いのお子さんなど送り出してください。

そして、子どもたちだけではなく全年齢層において主をほめたたえる者に造り変えていただきましょう。

結び

賛美は主へのささげものです。天と地の存在、また私たちの全存在をもって神さまに賛美をささげましょう。賛美を通して、神さまに私たちの心をささげましょう。私たちの思いをささげましょう。私たちの手足をささげましょう。私たちのことばをささげましょう。そうです。私の存在そのものをささげましょう。主は私たちの賛美のささげものを喜んで受け止めてくださいます。子どもが親に受け入れられていることに満足するように、私たちも唯一の三位一体の神さまに愛され受け入れられていることに喜び、その喜びを魂の叫びとして表しましょう。賛美の満ち溢れる教会を主が祝福してくだらないことがあるでしょうか。今年の教会標語「神に向かって歌う」が実現するならば、主は大いなる祝福を教会に注いでくださると確信しています。豊かな賛美をささげる一年にしましょう。